

医学部における原級留置生はどのような支援を必要としているか

What kind of supports do remedial medical students required?

関西医科大学 医学教育センター
助教 林 幹雄

研究期間

令和3年4月1日～令和4年3月31日

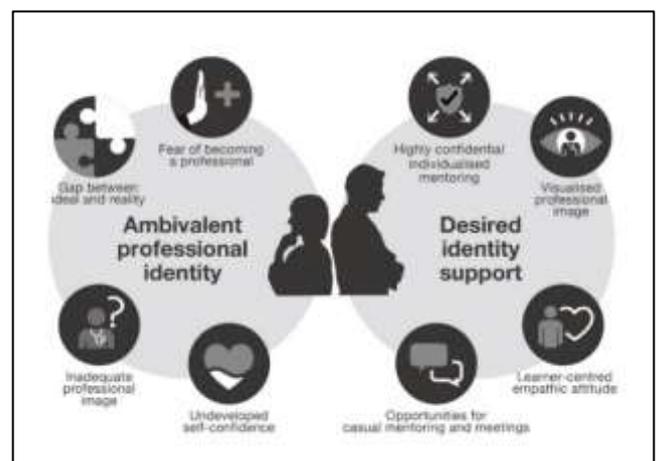
研究の概要

卒前医学教育過程において学修上の課題に直面し、原級留置となる医学生は全国的に増加傾向にあり、各大学の教員にとって原級留置生をどのように支援し指導するかは重要な課題となっている。これまでの研究によって、原級留置の経験が医学生の学修観にどのような影響を与え、原級留置生がどのような支援を必要としているかについては十分にあきらかにされていない。質的研究手法を通じて、上記の点をあきらかにすることによって、教員が原級留置生の支援や指導の方法を検討する際、重要な情報源として問題解決に貢献すると考えた。なお、理論的枠組みとしては、プロフェッショナル・アイデンティティ形成の理論を採用し、原級留置との関連性について検討を行った。

本研究では、医学部1～3年生の間に原級留置の経験がある22名（男性14名、女性8名、平均年齢24歳）を対象に、半構造化インタビュー調査を実施した。具体的なインタビュー調査内容として、「原級留置後に相談しづらいと感じることがあったか」、「原級留置の経験を通じて、原級留置生にはどのような支援が必要と考えるか」という質問を軸に、参加者個々人の原級留置に対する考えを探索した。また、採取したデータについてはテーマ分析の手法を用いて主研究者が分析を行い、他の2名の研究者によって分析結果の確認が行われた。また、研究者間で意見の相違がある場合には、議論を通じた合意形成が行われた。

研究参加者は原級留置の経験を通じて、様々な「プロフェッショナル・アイデンティティの揺らぎ」を経験しており、4つの主要なテーマとして、「医師になることへの恐怖感」、「理想と現実のギャップ」、「不十分な将来像」、「未熟な自立心」が抽出された。一方で、原級留置を経験した参加者が期待する「望ましいアイデンティティの支援」として、「個別化された機密性の高いメンタリング」、「将来像の可視化」、「学習者中心の共感的対応」、「分け隔てない指導やミーティングの機会」という4つの主要なテーマが抽出された（下記参照）。

本研究を通じて、原級留置の経験は単に医学部入学後における経験が影響しているだけでなく、医学部入学前のアイデンティティとも密接に関係していることがあきらかとなった。また、原級留置生は個別化された支援を強く希望していることから、教員は彼らの声により注意深く耳を傾け、対話を通じて、関係性を深めていくことが必要であると考えられた。



研究結果をまとめた概念図